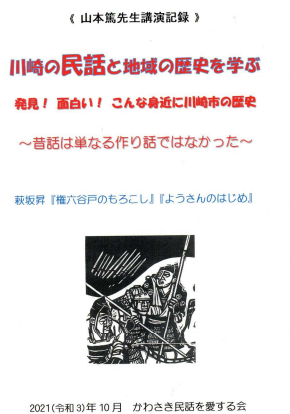


川崎市の人々

酒井 董美^{ただよし}

2021(令和3)年10月 かわさき民話を愛する会

⑤『出雲・石見の伝説』カバー 『川崎の民話と歴史を考える』の表紙

川崎市の荒金民雄氏から、このほど便りが届いた。その中に、かわさき民話を愛する会が昨年10月に発行した山本篤先生講演記録『川崎の民話と地域の歴史を学ぶ』(A5・48ページ・写真⑤)の冊子が含まれていたもので、一読した。表紙には萩坂昇『権六谷戸のもろこし』『ようさんのはじめ』の文字も見える。

この冊子の執筆者、山本篤氏は現役の川崎中学校長である。昭和36年生まれであるからこの講演をなさった令和2年11月は誕生日が過ぎておれば59歳ということになる。そして山本氏が30代前半で教師駆け出し時代、川崎市の萩坂昇氏の著作『かわさきのむかし話』に大きな影響を与えられたことが記されていた。

例えば「医王寺『せなかの赤いかに』の話」「権六谷戸のもろこし」の話」「馬絹『小判は木の葉』の話」「かわさきのむかし話」を引用して紹介されているものである。本書の奥付に記された『川崎の民話と地域の歴史を学ぶ』について、問い合わせ先として萩坂心一氏(かわさき民話を愛する会会長)と記されているが、この方は、姓から見ると前著の萩坂昇氏のご親族ではなからうかと筆者は想像している。

この萩坂昇氏(1926〜2003)とは筆者は親しかった。随分前になるが、隠岐島の海士町へ訪ねてこられたことがある。筆者が県立隠岐島前高校に勤務していたときである。その後、氏は松江市の拙宅へも一週間ばかり滞在され、筆者と共著で『出雲・石見の民話』(日本の伝説48・角川書店・写真左がそのカバー)を執筆した思い出も懐かしい。氏は伝説を物語風にされ、筆者は「伝説散歩」を分担して書いた。筆者は昔、川崎市の萩坂氏へのお宅へも一度伺ったことがある。

ところで『川崎の民話と地域の歴史を学ぶ』のページを繰ると、日本舞踊家である藤嶋とみ子氏は、舞踊の中に川崎市の伝説を取り入れて創作しておられる。川崎市の各種文化活動の重鎮の一人でもある氏は、このように民話に関心が深く、付表として掲載された「川崎市の民話資料一覧表」をまとめられる。残念ながら筆者はまだ藤嶋氏と直接お会いしていないが、数年前から、筆者主宰のオンライン懇談会や文書を通して、常に交流している仲である。ちなみにご夫君は、光触媒発見の昭先生である。

このようにして、このほど荒金民雄氏からいただいた便りと冊子を拝読しながら、何故かしら川崎市にも親しみを感じている筆者なのである。